

福山大学 図書館報

Library Announcement

Fukuyama University

第 8 号

2010.9

< 目 次 >

| | |
|----------------------------|-----------|
| 私が選んだ世界の古典ベスト 8 | 片岡俊郎・・・1 |
| 経済学部生の図書館利用法 | 塚原一郎・・・4 |
| 『働く理由』と就活 | 岡 晃弘・・・5 |
| 板東収容所のはなし - 異文化の交流 - | 真鍋圭司・・・6 |
| 日常の中の冒険 | 渡辺伸一・・・8 |
| 分館案内～新しく分館がオープンしました～ | 9 |
| 秋の七虫、春の七花 | 片岡俊郎・・・11 |

私が選んだ世界の古典ベスト 8

福山大学附属図書館長
経済学部経済学科教授 片岡俊郎

私は、本誌（『福山大学図書館報』第 2 号、2004 年 9 月）に「私が選んだ日本の古典ベスト 8」を掲載した。本号では、「私が選んだ世界の古典ベスト 8」を記すことにした。

私は、専門が経済学であり、専門を活かして地域開発論も講義してきた。世界の古典を選ぶに際し、1900 年までに発表されたもの、しかも、一国から一点と限定した。100 年後には、ある程度評価も定まる、しかも世界各国にできるだけ目配りしたかったからである。

私は、経済学の内、貨幣論に専念してきたが、師と仰いだのは、ドイツの K. マルクス（1818～1883 年）、イギリスの J. M. ケインズ（1883～1946 年）である。また、地域開発論で強調してきた視点は、文明論的視点である。その場合、文明を、政治、経済、軍事、科学技術、文化と整理し、なかでも文化を精神文化と理解し、学術、芸術、宗教、教育等と考えてきた。

J. M. ケインズは、師 A. マーシャル（1842～1924 年）を追悼する「アルフレッド・マーシャル伝」（1924 年）の中において、経済学者は、「ある程度」と一歩引いては

いるが、数学者で、歴史家で、政治家で、哲学者でなければならぬと記している。

私は、まずケインズを念頭に置いて、数学者として、イギリスの . ニュートン（1642～1727 年）、歴史家として、中国の司馬遷（B.C. 135 年頃～？）、政治家として、イタリアの A. ダンテ（1265～1321 年）、哲学者として、ギリシアのプラトン（B.C. 427～347 年）を選んだ。

次に前記 4 人に、文明論的視点で欠落している経済、軍事、そして文化の内、宗教、教育から、残り 4 人を選べば、次のようにいえるのではなかろうか。

軍事に関しては、『戦争と平和』（1863～1869 年）のロシアの作家、L. N. トルストイ（1828～1910 年）、また、文化の内、宗教に関しては、『赤と黒』（1830 年）、『パルムの僧院』（1839 年）のフランスの作家、H. B. スタンダール（1783～1842 年）、



さらに、文化の内、教育に関しては、『トム・ソーヤの冒険』（1876年）のアメリカの作家、マーク・トウェーン（1835～1910年）である。

最後に、私の専門である経済に関して、経済学者で、労働運動の指導者でもある、『経済学批判』（1859年）、『資本論』（1867～1894年）の著者、ドイツのK.マルクス（1818～1883年）を選んだ。なお、1840年代以降、マルクスの労働運動、著作活動において、終生の友人となるF.エンゲルス（1820～1895年）が実業家であったことはよく知られている。

世界の古典ベスト8を、人物で整理すれば、プラトン、司馬遷、ダンテ、ニュートン、スタンダール、トルストイ、マーク・トウェーン、そしてK.マルクスとなる。

私は、地域開発論で、文明を論じる場合、政治、経済、軍事、科学技術は、文化に裏づけられていなければならないとしてきた。

プラトンに関していえば、プラトンは、哲学者であり、彼の関心は、政治にあったことは、代表作『国家』あるいは『法律』によって明らかである。ケインズは、回想録「若き日の信条」（1938年）の中で、「われわれはプラトンの『対話篇』の世界の中にいたのであって、『法律篇』はおろか、『国家篇』にも到達していなかった」と記している。プラトンの著作を、前期、中期、後期と分け、前期の代表作が、『ソクラテスの弁明』、中期が、『国家』、後期が、『法律』と理解すれば、ケインズの言は、プラトンを位置づけるのに、適切な表現であるといえる。

司馬遷に関して言えば、彼の代表作『史記』は、歴史家の著作であり、彼が政治に関心を示していたことは、次のような説明からもわかる。「多少の飛躍を恐れずに言えば、司馬遷はすべての行為の価値を政治との関連において考える儒家的立場に立っ

ていたのであり、したがって現実の社会（官界）における失脚は、本来ならば立德・立功によって具現すべき己の抱負を、立言という行為の中に盛り込まざるを得ない」（青木五郎・中村嘉弘編著『史記の事典』、大修館書店、2002年）。前文に言う、現実の社会における失脚とは、匈奴にくだった將軍の李陵を弁護して、時の絶対的権力者、漢の武帝の怒りにふれ、宮刑（去勢の刑）に処せられたことを指す。

アリギエリ・ダンテに関して言えば、彼の代表作『神曲』は、宗教的寓話として紹介されるが、彼は詩人として芸術家ではあるが、実際に政治活動に参加し、不遇のうちに客死する。彼は、『神曲』において、彼の政敵の背後にいる時の権力者、ローマ教皇ボニファチウス8世に対し厳しく断罪していることは、よく知られている。

アイザック・ニュートンに関して言えば、彼は数学者であるとともに、物理学者であり、天文学者でもある。彼の学者としての代表作は、『プリンシピアー自然哲学の数学的原理一』であるが、彼が造幣局長官として経済活動にかかわり、ロイヤル・ソサエティ会長として科学技術の振興に貢献したことも事実である。なお、ケインズは、『人物評伝』を1933年に公刊するが、1951年に弟ジョフリー・ケインズによって、3篇が追加される。その中に「人間ニュートン」が見い出される。

私が古代、中世、近世で選んだ4人においては、近世以前は、政治と軍事は一体であり、政治に関与するプラトンは、哲学者であり教育者、司馬遷は、歴史家、ダンテは、詩人で宗教家でもある。また、経済と科学技術への関与が、数学者ニュートンによってなされているということになれば、政治、経済、軍事、科学技術が、文化（学術、芸術、宗教、教育）に裏づけられていることは明らかであろう。

私は、本誌前号（『福山大学図書館報』第7号、2009年9月）において、「少年の夢、老人の理想」という一文を書いた。少年の夢は、老人になっても追い求め続けるものであり、夢が理想とつながることによって、理想は、必ず実現するものであると記した。

スタンダール『赤と黒』では、主人公ジュリアン・ソレルは、青年である。トルストイ『戦争と平和』では、主人公アンドレイ・ボルコンスキーとピエール・ベズホフは、壮年であるが、主題のナポレオン戦争で、ロシアを守った老将軍クトゥゾフ（1745～1813年）が、作中で重要な役割を果たしている。マーク・トウェーン『トム・ソーヤの冒険』は、主人公が少年であることは、言うまでもないであろう。

私が「世界の古典ベスト8」に小説家である3者、3作品を選んだのは、少年、青年、壮年、老年の夢が語られているからである。しかも、『赤と黒』の主人公が、夢を野心とみなされ、破滅するのは、貴族社会の中で夢は、赤（軍人）と黒（僧侶）によってしか、実現できなかつたからである。夢は理想と結びつかなかつたのである。夢が理想と結びつくためには、自由を必要とするのである。トム・ソーヤは少年ではあるが、夢を追い求め続けることができたのは、自由の国アメリカの物語であることと無関係とは言えない。



私が専門の経済学の中から、K.マルクスを選んだのは、ケインズとの関係でケインズが「アルフレッド・マーシャル伝」であげた経済学者の条件と結びつけ、次のように言えるからである。

マルクスは数学者ではないが、自然科学的分析視角を身につけていたことは、彼の学位論文『デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異』（1841年）で理解でき、彼が歴史家といえるのは、著作『ルイ・ボナパルト、ブリュメール18日』（1852年）等で、政治家であるのは、『共産党宣言』（1848年）等の発表と労働運動の指導者であったことから明らかである。また、彼が哲学者であり、人文科学的分析視角が彼の経済学において重要な位置を占めていることは、『経済学哲学草稿』（1844年）等でわかる。ケインズが言う「経済学者は、ある程度、数学者で歴史家で政治家で哲学者でなければならぬ」に該当する人物が、K.マルクスであるともいえる。K.マルクスの経済学者としての著作をあげるとすれば、彼の代表作『資本論』（1867年）ということになる。

世界の古典ベスト8を確認すれば、次のようにいえる。プラトンにおいては、プラトン哲学の集大成ともいえる『法律』、司馬遷は『史記』、ダンテは『神曲』、ニュートンは『プリンシピア』、スタンダールは『赤と黒』、トルストイは『戦争と平和』、マーク・トウェーンは『トム・ソーヤの冒険』、最後に、経済学者K.マルクスの『資本論』となる。プラトンはギリシア、司馬遷は中国、ダンテはイタリア、ニュートンはイギリス、スタンダールはフランス、トルストイはロシア、マーク・トウェーンはアメリカ、そして、K.マルクスはドイツを代表して選ばれたことになる。

経済学部生の図書館利用法

経済学部講師 塚原 一郎

大学生活で図書館をどのくらい利用したかということは重要なことである。大学で行くところは、授業の教室、食堂、部室等が主なものだが、時間が空いた時は、是非図書館へ行ってほしい。費用対効果でも、同じ学費を払っているのなら、図書館を最大限利用する方がよい。

以下では、私が考える経済学部生としての図書館利用法の例を紹介する。

まず、福山大学附属図書館に入ると、1週間分の新聞が綴じられるコーナーがある。経済学部生の基本は、社会・経済ニュースへの興味である。少なくとも見出しは確認しておきたい。過去の新聞を見たければ、図書館の職員の方に頼むか、縮刷版も利用できる。

奥に進むと、雑誌コーナーがある。専門雑誌は、本屋の雑誌と比べると難しいが、一度は全体を見渡してみたい。日本評論社の『経済セミナー』などは、経済学部生向けの雑誌なので目次を見て興味があるものは読んでほしい。

右側には、洋書(外国の本)が並んでいる。外国の本というと、見るだけで嫌になるかもしれないが、英語等が得意な人は挑戦してみたい。なお、経済学部では、大学院生以上になると、読む文献の半分以上は英語である。

勉強机を通り過ぎて、反対側は和書(日本の本)である。以下、図書分類番号に従って紹介していく。

経済学部の基本は、【331】である。必修科目の「経済学入門」「マクロ経済学」「ミクロ経済学」等に関係する本が、新しい物から古い物までたくさん書棚に並んでいる。数学や統計・コンピューター関連は、【331.19】である。1つ奥の書

棚に行くと、経済学の歴史や思想関係の本が、たくさんある。歴史や思想が好きなら「本当に文系」の人にとっては退屈させないコーナーである。

以下、【332】経済史・事情、経済体制、【333】経済政策、国際経済、【334】人口、土地、資源、【335】企業、経営、【336】経営管理、【337】貨幣通貨、【338】金融、銀行、信託、【339】保険と続く。【340】台には財政、【360】台には労働や社会保障関連もある。自分の興味がある分野が分かれば、それに該当する番号の書棚に行けばよい。例えば、ある国の経済についてのレポートを書くときは、【333】から探せばよい。特に税務会計学科の人が探すのは【336】である。

他には、統計や情報分野を専攻している人は【400】番台の自然科学コーナー、スポーツマネジメント関係は【780】番台となる。サッカーや野球の本もたくさん並んでいるので積極的に読んでほしい。

大学では、自分の専門を勉強するのはもちろん大切であるが、教養を深める、つまり、自分の専門以外のことを知ることが重要である。上で紹介した図書分類番号にこだわらず、経済学と全く関係ない分野の本にも挑戦してほしい。

図書館内にはデータベースやパソコン、AV資料もあり、最近では電子書籍、電子雑誌も増えているので、有効利用してほしい。

3階に行くと、グループ学習室もある。特に3年生のゼミでは、ゼミの課題をする際に、グループ学習室で時間を忘れるほど議論をし、考えてほしい。就職活動になってはじめてグループ面接対策などをするのはなく、普段から友達と一緒に勉強をして、議論しておく方がよい。3年生に限らず、試験勉強やレポートにも、利用してほしい。教わることはもちろんだが、友達に教えることもよい勉強になる。

本学の図書館には経済学の教科書的な

本がたくさん並んでいる。授業で少しでも分からないことがあれば、図書館へ行き、調べてみるとよい。授業が物足りない場合は、図書館で上のレベルの本を読むべきである。大学の授業は、授業を聞いたから100%理解出来るようにはできていない。自分で調べ、本を読み、考える等の予習復習を相当量することにより、授業内容が理解できるようになる。本をもっとたくさん借りたい、もっと長くかりたい、読みたい本がない、というような要望は多数出してほしい。図書館の職員の方は、図書の専門家なので、積極的に質問・相談してほしい。親身になって対応してくれる。

読む本が分からない場合、先生に聞くのもよいが、一番よいのは、自分で自分にあった本を探すことである。理解力や既存知識は人によって違うし、先生と学生でも違う。先生がよいと言った本が必ずしも自分に合っているとは限らない。大事なものは自分の目でたくさんの本を見ることである。

最後に、本でも雑誌でも、特に専門書は初めから最後まで一冊読もうとすると、非常に苦痛になる。まえがきとあとがきを読み、後は自分の興味のあるところだけ読み、次の本へと移るとよい。それをくり返すうちに、本当に自分に合う本が見つかるだろう。

『働く理由』と就活

人間文化学部教授 岡 晃弘

『働く理由』は職業・仕事について、色々な本などから集めた99の言葉(断片)と、著者の解説とを交互に展開している本である。

一般に文章の断片の意味は文章全体の文脈の中で読み取らねばならないが、抜き出し方によっては断片だけでも読者をひきつける力を持っている。たとえば国語の入試問題の文章はいわば長い断片だが、出題者が精選した箇所だけあって、そのような魅力を持つものが多い。

『働く理由』はおもに職業・仕事の動機(モチベーション)を扱っている。人は何のために働くのか、自分の「やりたいこと」は何か、それをどのようにして見つけるか、などについて述べられている。99の言葉のうちのほんの一部を(引用の引用として)ここで紹介してみよう。

「自分が好きなこと、それしかやらない。

そう決めるのは自分である。そう決めてちっとも差し支えない。ただ現実には、好きなことをするために、ほかのいろいろなことをしなくてはならない。それも好きになればいい。(中略)本当に好きなら苦労はいとわない。苦労が苦労ではないからである。苦労したくないなら、結局それほど『好きではない』のである。」(No.5、養老孟司)

大学の1・2年次は自分の「やりたいこと」を探す余裕のある時期だが、3・4年次になると就活が本格化し、社会の現実が迫ってくる。それに応じて、次のような言葉も次第に現実味を帯びてくるだろう。

「仕事の95%は繰り返しのルーティンワーク。でも、残りの5%をどう膨らませるかで仕事を面白くできるかどうかが決まる。どこかに面白い仕事がないかと探すんじゃなく、目の前の仕事を面白くする方法を探すことの方が重要。楽しいことをするんじゃなくて、することを楽しんでみる。こっちの方が知的だし、ずっと豊かな人生になると思うんです。」

(No.49、松永真理)

『働く理由』の続編として『働く理由 続』も出版されている。著者はその第7章(迷う力、決める力)で、職業や会社を自分で決められない人を、2つのパターンに分けている。

第1のパターンは「決め方が分からない人」。そのような人に対して、著者はアメリカの心理学者ディンクレッジの「望ましい意思決定の手順」を示している。

「何を決定するのかをはっきりさせる
必要な情報を集める
選択肢を挙げてみる
選択基準(自分の価値観)となる項目をいくつか挙げてみて、その重要度を評価する
に基づいて選択肢の中からひとつを選ぶ
行動する
得られた結果について検討する」

第2のパターンは「決めるのが怖い人」。そのような人に対しては、不完全さと不確実性を喜んで受け入れることを著者は

勧めている。著者である戸田智弘氏の言葉をここで引用しよう。

「すべての決定は仮決定にすぎず、最終決定ではないということを理解する。だから、とりあえず決定する。あなたの未来は決定から始まるのだ。そして前に進むこと。間違ったらやり直せばいい。あなたには『失敗する自由』がある。」(p.119)

最後に、就職試験に数社落ちた学生同士が話している場面を想像してほしい。

「俺たち、もう終わっちゃったのかなあ」「ばかやろう、まだ始まっちゃいねーよ」

この言葉は、もともと北野武の映画「キッズ・リターン」の中のものだ(『働く理由 続』でもNo.46として引用されている)。映画では、挫折を経た2人が最後の場面で自転車に乗りながら交わすセリフだ。その言葉を私が勝手に映画とは全く異なる場面に当てはめてみた。数社落ちたくらいで就活はまだ始まっていないのである。

〔図書館所蔵情報〕 ここで紹介された以下2点の図書は、本学図書館でも所蔵しています。
戸田智弘『99の名言に学ぶシゴト論。(働く理由)』(ディスカヴァー・トゥエンティワン、2007.7)【366/T】
戸田智弘『99の至言に学ぶジンセイ論。(働く理由 続)』(ディスカヴァー・トゥエンティワン、2008.12)【366/T続】

板東収容所のはなし - 異文化の交流 -

工学部教授 真鍋 圭司

この原稿依頼の打診を学科主任から受けたのが6月であった。困ってしまって、他に誰もいなければということで一応返事しておいた。しかし結局書くはめになり、7月に本を読んで書くということで許してもらった。ところが、感動するような本を探そうとしているうちに7月も半分過ぎてしまった。

過去の図書館報を開いてみて、どうしようかと考えた。私と同じように書くこ

とに困った時の心情をユーモアをまじえて上手に書かれている先生がいらっしゃり、それを読んで大変安心した。私が困ってしまう原因はその、「教養人への道」そのものだと痛感した。情けないことだ。別のページに目を向けると収容所についての本の紹介があった。収容所といえば、ということで思い浮かんだ話があった。

私が生まれたのは徳島県であり、中学高校時代を過ごした鳴門市の実家の近所に、板東収容所の跡地がある。そこを舞台にした映画『バルトの楽園』は2006年夏に公開されたが少しマイナーな映画なのでご存知ない方が大部分だと思う。しか

し、徳島では大々的に宣伝されており、お盆に帰省した際父と見に行った。また、DVDも購入してよく見たものだ。その映画がきっかけで板東捕虜収容所に少し関心を持った。その収容所に関する文献はいろいろあるみたいだが、本格的に調べようようなことはとてもできないので、一般向けの文庫で『松江豊寿と会津武士道』という本を読んだ。

板東収容所というのは、第一次世界大戦時に、日本がドイツ人を捕虜としていた収容所である。この収容所は普通の収容所と違い、捕虜を人間として人道的に扱ったらしい。これはその収容所の所長であった松江豊寿という人物の方針であり、これを実際に実行したのだから信じられないような話である。その収容所には、パン工場や、運動場などいろいろな施設があり、また捕虜達で新聞を作って発行されていたというから驚きである。また、捕虜達の中にはいろいろな職人、学者や音楽家もいて、ドイツの文化を地元の徳島に紹介した。ベートーベンの第九交響曲を日本で初めて演奏したのはその地だという話である。映画では、松平健がその松江所長役を演じている。

松江所長は会津の出身で、会津は戊辰戦争に敗北した経緯もあり、彼は敗者が置かれる厳しい環境をよく理解していた。この本は彼がとった人道的な行動を、会津武士道と関連させて解説している。松江所長のおかげで、まさに奇跡のような模範的収容所が現実に日本に存在したのである。鳴門市ドイツ館には、その古い資料が展示されている。日本とドイツの文化交流が生まれ、洋菓子製造技術、養鶏、建築、土木技術などがドイツから伝わった。板東の町にはドイツ橋という石を並べて組み立てたような橋もある。

理系、文系という分類を借用するなら

ば私は理系なので、これ以上書くと、日本史や世界史など知識も必要になってボロがでるのでやめたほうが無難である。

ところで理系の話では、「いまさら聞けない計算力学の常識」という本は以前に読んでいたのでそれについては書けそうだ。計算力学は私の専門分野でもあり、おもしろそうな題名なので購入した。いろいろな分野の専門家が執筆しており、他分野の人には、はずかしくて聞けないような常識的な内容を解説しようという趣旨の本である。本中には数式が多く出てくるが、いわゆる専門書のような堅苦しさはなく、比較的わかりやすいと言えると思う。とは言ってもやはり専門的な内容で、大学院生以上の計算力学に予備知識がある人を対象にした本であろう。計算手法は有限要素法を中心に解説されている。固体と流体の両方の計算法に触れているが、有限要素法は、固体の変形計算を得意とする。それを流体の解析に応用するには、さまざまな問題がある。安定化有限要素法というのは、その解決の一手法であるが、これについて、非常にわかりやすい解説がなされている。最小自乗法との関係の説明は、提案者の英語の原論文を読んでも解りにくいのが、平易に説明されている。この本は土木系の先生が中心になって執筆された本であり、機械系の私としてはいろいろと新鮮に感じる部分も多かった。

このように理系の本について書いてみてもやはり無味乾燥な内容になってしまう。なかなか困ったものだ。しかし上の話では、日本とドイツの文化の交流、また、計算力学でも固体と流体、さらには土木と機械など専門領域の異なった部分の文化が交流するという意味では共通点を見出せる。異文化が交流するのは困難を伴うが、悪くはないと思った次第である。

日常の中の冒険

生命工学部講師 渡辺 伸一



野田知佑著『日本の川を旅する』（新潮社文庫）、私がこれまでもっとも影響を受けた本がこの本かもしれない。

私がこの本を読んだのは、中学一年の夏だった。当時、私はさまざまな冒険記にはまっていた。スコット、アムンゼンの南極探検記などを読んで、冒険家を夢見る少年であった。冒険家に憧れる一方で、同時に将来への失望感も抱いていた。21世紀を夢見る冒険家の卵にとって、南極点到達のような前人未到の快挙など残されているはずもなかったからである。中学生の自分から見ても、当時の冒険家の試みはすでに重箱の隅を突くような、虚しい行為に思えた。そんなときに手にしたのがこの本だった。この本は私の冒険に対する考えを改め、さらに私の冒険心を掻きたてるものとなった。

当時、海外の未踏の場所での探検記を読み、冒険心を膨らませることが多かったのだが、この本の内容は、日本全国14の河川をカヌーで下る旅行記である。著者は、当時は珍しかった折りたたみ式のカヌーを担ぎ、電車やバスを乗り継い

で川の上流部へと辿り着き、そこから一週間ほどかけて、のんびりとその川を下る。そこでの自然や人との交流を淡々と記したものだ。無論、その中には、生命の危機に瀕するようなドラマティックな展開はない。しかし、私はいまでもこの本の中の旅こそが、私にとっての冒険だと思っている。

この本を読んで、日本の身近な自然がこれほど素晴らしいものか、また、狭いと思っていた日本にこれほど多様な自然があるものかと驚いた。私は日本をもっと知りたくなった。まだまだ、冒険家も捨てたものではない。私が見るべきもの、経験すべきものはたくさんあると期待に胸が膨らんだ。

この本の中には、私が育った町を流れる川（多摩川）での体験も記されている。いまでもそ水質が改善されつつあるものの、当時の多摩川は汚く、川下りをするには日本でもっとも危険な川だと紹介されていた。それは水質が悪いだけでなく、そこに住む人（釣り人）がひどく攻撃的だからだと記されている。それは、他の自然豊かな河川での旅行記とは対照的な内容だった。

多摩川は山梨県秩父山地を源泉とし、私が育った神奈川県川崎市に沿って海へと流れる。上流部は水質もよく美しい川であるが、140kmを経るうちに水は濁る。私が中学生だった頃、多摩川の上流でヤマメやイwana釣りを楽しみ、中流でコイやフナ釣り、河口ではハゼやアナゴ釣りを楽しんでいた。多摩川は、上流から下流へ下る間に同じ川とは思えない変貌を遂げていた。著者は、この川を「1000万都民が収奪した川の残骸」と比喻している。この本を読んで、私もこの著者のように川の自然環境やそこに住む人の性質の変化を体験したくなった。

高校に入学してすぐの夏休み、私はそれを体験するための旅に出た。テントや寝袋をバックパックに詰め、多摩川の源流部から河口までの140kmを歩いてみた。その間、この本の著者に習い、旅はできるだけゆっくりと進むよう努めた。上流部から一週間をかけて歩き、やがて海へと到達した。その経験を通じて、川の水とそこで暮らす人の様子に変貌していくのを憶えている。水がきれいなうちは、みなとても親切で愛想がよい。大きなバックを背負って歩く少年に誰もが「どこまで行くのか」と声をかけてくれたものである。しかし、水が汚れるにつれて、みな愛想が悪くなった。人に接する機会は増えるものの、他人にまったく興味がないのか声をかけられることもなければ、目を合わせる人さえなかった。なんとも不思議な経験だった。

この旅が、私のはじめての冒険だったのかもしれない。その後、私は高校の三年間を通じて日本各地に旅に出かけた。大学は、高校生活では行くことのできなかった沖縄へと渡った。大学卒業後は自身の研究のために南極をはじめ、ふつうの人ではなかなか行けない土地へ行く機会にも恵まれた。しかし、どんな土地へ行っても、私はこの本の著者の言葉を忘れないでいる。「冒険は三日もすると日常になる」。そのおかげで、私はどんな土地での生活にも順応し、それを日常とすることができた。また、私はこうも思う「日常の中にこそ冒険がある」。退屈に感じる日常の中にも、新たな発見は多いものである。福山に来て二年以上が経つが、私は日常の中での体験からいまでも新鮮な感動を得ることができている。

～新しく分館がオープンしました～

これまで10号館3階にあった薬学部分館が、2010年4月に34号館1階に引越し、名称を「附属図書館分館」と改め開館しました。



< 34号館 >

この1階に分館があります。

本館（15号館2階閲覧室）の約半分の床面積1,100㎡と176の座席、収容冊数約57,000冊を擁する広く新しい分館になりました。

個人学習用の仕切つき閲覧机やA Vブース、グループ学習室、電動書架など、これまでになかったスペースが出来ました。また、今まで置いていなかったファッション誌などの購入も開始しました。



< 仕切つき閲覧机 >



< A Vブース >



< 新着図書・雑誌コーナー >



< 情報検索コーナー >

新しくオープンした分館は1号館に近くなり、いろいろな学部学科のみなさんに足を運んでもらい易くなったのではと思います。ご利用お待ちしております。

秋の七虫、春の七花

福山大学大学院経済学研究科長
(経済学部経済学科教授)片岡俊郎

2010年、日本の古都、奈良は、平城遷都1300年、春から夏へ、夏から秋へ、多彩な行事が開催された。社会科学である経済学は、研究室から一步外へ出る必要がある。今年の私は、教え子との研修旅行で、春は青森県弘前で春全開の桜を見、夏は長野で善光寺に参詣し、秋には紅葉の中、秋田で秋の稔りの成果であるきりたんぼと八幡平の松茸を食し、冬は山形、月山山麓で雪にうずもれた宿舎での、山鳥の鍋を楽しみに出かける予定である。

2010年8月、長野への旅の途中で、秋の七草が存在するなら、秋の七虫も選べるのではないかと、話題になった。長野市内で宿泊したが、夕食は郊外の名料亭でとった。その折、主人から一言と「虫の音」と直筆で書かれた紙片が、私の席に置かれていた。

秋の七草は、はぎ、おばな、くず、なでしこ、おみなえし、ふじばかま、ききょう、からなる。秋の七虫は、秋の気配を示す、ひぐらし(または、つくつくぼうし)、赤とんぼ、秋の七草にちなみ、秋の花を求める蝶(春の蝶と区別するために、はぐれ黄蝶と呼ぶことにする)、秋の稔りと結びつけて、いなご、かまきり、秋の深まりとして、こおろぎときりぎりすを選んでみた。

春の七草は、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベ、ホトケノザ、スズナ、スズシロを指す。日本の春を代表する桜が、春の七草では捉え切れないので、秋の七虫を念頭に、春の七花も選ぶことになった。春の気配を示すものとして、梅の花、桃の花、春の七草にちなみ、ナズナ、スズナ、スズシロが、アブラナ科に所属していることから、ア

ブラナ科の菜の花、春全開として、桜の花、藤の花、夏来たるとして、卯の花、花しょうぶをあげた。

日本の四季は、日本の行事あるいは日本の歴史と重ねてみると、より身近なものになる。春の七花の桃は、三月のひな祭りに欠かせない。また、春の七花の花しょうぶは、五月の端午の節句と結びつく。春の七花の梅は、奈良時代、日本が尊敬し、学ぼうとした隣国中国との関係を、春の七花の藤の花は、奈良時代一時全盛をきわめた藤原氏を象徴している。

日本の四季は、日本人の五感と強く結びついている。春の七草が、七草がゆとして味覚、秋の七草は月見の宴で視覚と関係している。春の七花と秋の七虫が、その欠を補うとすれば、春の七花の梅、卯の花は、嗅覚を、秋の七虫のせみ、こおろぎ、きりぎりすは、聴覚を、また、花しょうぶは、端午の節句のしょうぶ湯で、触覚を通して存在感を示す。

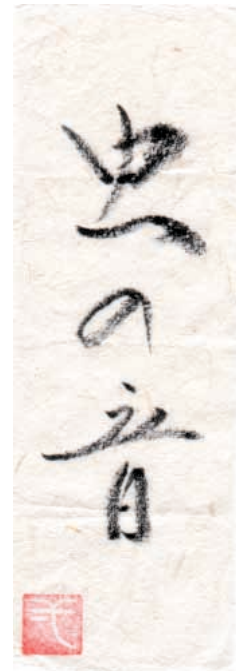
日本の四季を語る場合、唱歌の存在も無視できない。春の七花の卯の花は、佐佐木信綱作詞の「夏は来ぬ」の中に、秋の七虫、こおろぎ、きりぎりすは、文部省唱歌「虫のこえ」で、1番の歌詞に登場するまつむし、すずむしは、こおろぎ科、2番のきりぎりす、くつわむし、うまおいは、きりぎりす科でまとめられ、立派に理科の教材としても、役立っている。春の七花の菜の花は、文部省唱歌「おぼろづきよ朧月夜」で、「菜の花畠に入日薄れ」としてよく知られている。

私は、専門の貨幣論を研究する中で、貨幣制度、貨幣、貨幣政策は、三位一体であることを教えられ、確認してきた。その際、貨幣制度は、一般と特殊、模倣と創造、急進と漸進、政治的処理と経済的処理をキーワードにまとめた。

私の社会人との教育、研修に関して言えば、東京、大阪の例会は会場を中心に、下関、萩、津和野、鳥取、松江、能登輪島と、教育、研修旅行で場所を移す。一般と特殊である。その中の数名と企画した新たな研修旅行は、山形から始まり、秋田、弘前、長野と、場所・回数を増やしていった。新たな研修旅行の創造を漸進的に進めてきたのである。前記例会、旅行と三位一体としてである。私の講義、講演等は、定年でいずれ止めねばならない時が来る。しかし、自ら進んで仲間と企画したものは、成果があがれば、継続して行なうことができる。具体的事実の積み上げによる、短期、中期、長期を見通した経済的処理である。定年による中断が、政治的処理として行われるのと同線を画している。

2010年の奈良の行事も11月の前半で終了し、今年に限って言えば、1月からの準備期間を経て、4月から11月

まで、観光客は奈良を春から夏へ、夏から秋へ、十分味わえたと思う。祭は終り、秋も深まり、こおろぎ、きりぎりすの虫の音も聞こえなくなった。古歌でも有名な奈良の桜、奈良の春が待ち遠しい。



編集後記

恒例ではございますが、この度福山大学図書館報第8号発刊となりました。原稿を執筆・寄稿下さいました教職員の皆様には大変お世話になりまして誠に有難うございました。一般に読書離れ・図書館離れが懸念される中、本号に於きましてご案内のとおり、本学では昨春に分館が新しくオープン致しました。これを機に一層の図書館利用の促進（入館者増）を図る為、更に広報活動にも力を入れて参る所存ですので、今後ともお力添えを賜りますよう切にお願い申し上げます、御礼に代えさせていただきます。（桑田・亀井）

平成23年3月20日発行

編集・発行 福山大学附属図書館

〒729-0292 広島県福山市学園町1番地三蔵

<http://libaxp.fulib.fukuyama-u.ac.jp/>

印刷 三原プリント株式会社

〒723-0041 広島県三原市和田一丁目5-13